

平成三十年度

国語

(文学科 日本語日本文学専攻)

9:30
～
11:00

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、問題冊子、解答用紙に手を触れてはいけません。
- 2 この問題冊子は8ページで、解答用紙は2枚あります。
- 3 試験開始の合図があつたら、まずページ数、枚数を確認し(足りない場合は、手を挙げて監督者に知らせること)、全部の解答用紙に受験番号を記入してください。
- 4 試験中に、印刷の不鮮明な箇所やページの脱落などに気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 5 解答は、解答用紙の所定の欄に記入してください。
- 6 この問題冊子にある余白のページは、下書きなどに利用してかまいません。
- 7 試験終了後、問題冊子と受験票は持ち帰ってください。

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

【省略】

【省略】

【省略】

(安藤宏『太宰治』二〇〇二年、筑摩書房、22〜27ページより作成)

注1 素封家 …… 財産家。

注2 女給 …… 明治から昭和にかけて、カフェやバーで客の接待をした女性。

問一 — 部①〜⑫の片仮名は漢字に、漢字は平仮名に直しなさい。

問二 — 部ア〜エの語句の意味を説明しなさい。

問三 — 部A「彼の太宰嫌いは、確かに近親憎悪を思わせる」とはどういうことか、わかりやすく説明しなさい。

問四 — 部B「青春の文学」の、ここでの意味を、五〇字以内で説明しなさい。

問五 — 部C「そのこと自体が驚異的な事実」とあるが、「そのこと」の内容を明らかにしながら、なぜ「驚異的」なのかわかりやすく説明しなさい。

問六 — 部D「なぜこれほどまでに「好き」か「嫌い」かの二つに読み手を選別してしまうのか」に対する筆者の考えを、一五〇字以内で説明しなさい。

問七 — 部E「自己の背丈」の、ここでの意味を説明しなさい。

問八 — 部F「周囲のエゴイズムを映し出す」と同じ意味で使われている本文の表現を、二〇字以内で書き抜きなさい。

問九 — 部G「こうしたトリック」とはどういうものか、本文の言葉を使って六〇字以内で説明しなさい。

二 次の文章は『うつほ物語』の一場面で、院の帝（上皇）・内裏の帝（天皇）の御前で、涼すずしと仲忠なかただとが琴の技量を競い合う部分である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

かかるほどに、涼、仲忠、御琴の音ね①等し。右大将のぬし注1、持たせたまへるなん風ふ②を、帝に、「これなむ仲忠が見Aたまへぬ琴にはべるなり。②仕うまつらせむ。」と奏Bし。Cたまふ。D賜たまふはりて何心なくかき鳴らすに、天地ゆすりて響く。A帝みかどよりはじめたてまつりて、大きにおどろきたまふ。仲忠、「今は限り、この琴、まさに仕うまつり静まりなむや。ねたくくちをしきに、同じくは天地おどろくばかり仕うまつらむ。」と思ひぬ。涼、弥行いやまぎ③が琴、なん風に劣らぬあり。このすさの琴注4を院の帝に参Eらす。帝、同じ声に③調Fべて賜Fふ。仲忠、かの七人の一つてふ山の師注5の④手、涼は弥行が琴を、少し⑤ねたう仕うまつるに、雲の上より響き、地の下より⑥とよみ、風雲動きて、月星騒ぐ。礫ついでのやうなる氷降ひり、雷鳴いかづちり閃ひらく。雪、衾ふすまのごと凝こりて、I降ふるすなはち消えぬ。仲忠、七人の人の調べたる大曲、残さず弾く。涼、弥行が大曲の音出づる限り仕うまつる。時に天人、下くだりて舞ふ。仲忠、琴に合はせて弾く。

ウ 朝あさばらけほのかに見れば飽かぬかな中なる乙女しはしとめなむ
帰りて、今一かへり舞ひて、上りぬ。

（『うつほ物語』（吹上・下）より作成）

- 注1 右大将のぬし……仲忠の父、兼雅。仲忠の母方の祖父である俊蔭としかげが異国からもたらした秘琴「なん風」を、仲忠の母から預かってきていた。
- 注2 なん風……琴の名。
- 注3 弥行……涼の琴の師。この場面には登場していない。
- 注4 すさの琴……琴の名。
- 注5 かの七人の一つてふ山の師……俊蔭の琴の師は七つの山にそれぞれ住んでいたが、その「一つ」という山（最初の山）の師。

問一 ——部①～⑥の語の意味を書きなさい。

問二 ——部A～Fについて、誰から誰への敬意を示す敬語かを答えなさい。また、D～Fについては、琴が誰から誰に移動したかをも答えなさい。

問三 ——部A、Iを現代日本語に訳しなさい。

問四 ——部ウの和歌を、現代日本語に訳しなさい。また、この和歌は『古今和歌集』や『小

倉百人一首』などにおさめられている「天つ風雲のかよひ路ふきとちよをとめの姿しばし
とどめむ」との類似が指摘されていますが、『うつほ物語』、『古今和歌集』、『小倉百
人一首』の成立順序を古いものから順に答えなさい。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

象^{さい}犀^{さい}珠^{しゆ}玉^{ぎよ}怪^{かい}珍^{しん}之^の物^{もの}、有^レ悦^{よろこ}□^{バシムル}人^{ひと}之^の耳^{みみ}目^め、而^レ不^レ適^せ

於^ニ用^ニ。金^{きん}石^{せき}草^{そう}木^{ぼく}糸^{いと}麻^ま五^ご穀^{こく}六^{りく}材^{ざい}、有^レ適^{レドモ}於^ニ用^ニ、而^レ用^{フルバ}之^の

則^チ弊^{やぶ}、取^{レバ}之^の則^チ竭^つ。悦^{バシメテ}□^ニ人^{ひと}之^の耳^{みみ}目^め、而^レ適^シ於^ニ用^ニ、用^{フルモ}之^の

之^の而^レ不^レ弊^レ、取^{ルモ}之^の而^レ不^レ竭^キ、賢^{けん}不^レ肖^{せう}之^の所^{ところ}得^{とく}、各^{かく}因^{いん}其^{その}才^{さい}、

仁^{にん}智^ち之^の所^{ところ}見^み、各^{かく}随^{したが}其^{その}分^{ぶん}、才^{さい}分^{ぶん}不^レ同^{どう}、而^レ求^{メテ}無^レ不^レ獲^ハ者^{しや}、

惟^{ただ}書^{ノミ}乎^か。

(蘇^そ軾^{しやく}、『経^{きやう}進^{しん}東^{とう}坡^ぱ文^{ぶん}集^{しふ}事^じ略^{りやく}』より作成)

注 象犀 …… 象の牙やサイの角。

怪珍 …… 珍しい宝。

糸 …… 絹。

六材 …… いろいろな材料。

不肖 …… できがわるい人。

仁智 …… 仁徳のある人や知恵のある人。

問一 □には置き字が入ります。二か所とも同じ漢字です。ここに入る置き字としては適切でないものを次のア～オから二つ選び記号で答えなさい。

ア 於 イ 而 ウ 矣 エ 乎 オ 于

問二 — 部Aを現代日本語に訳しなさい。

問三 — 部Bを漢字かな交じりの書き下し文にしなさい(現代仮名遣いでもよい)。なお、

返り点・送り仮名は省略してあります。

問四 — 部Cの意味を答えなさい。

問五 — 部は何のどのような特徴を表しているか、わかりやすく説明しなさい。このとき、

この特徴が何と比べてどう異なるかがわかるように書くこと。

